智代アフターsecond～朋也が残したもの～

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
智代アフターｓｅｃｏｎｄ～朋也が残したもの～

【Ｎコード】
Ｎ４６６８Ｄ

【作者名】
桂　ヒナギク

【あらすじ】
この作品はＰＳ２ゲーム・智代アフターの続編です。原作を知らない方は「ＣＬＡＮＮＡＤ智代ルート」と「智代アフター」を一度プレイしてからお読み下さい。と、言いつつも、智代は殆ど出て来ない。

After 1. 出会い

俺の名は岡崎（おかざき） 朋徳。光坂高校に通う高校生である。
「起きろ朋徳」
その声と共に俺は体を揺さぶられて目を覚ました。
視界が広がり、女性の姿を確認する。
「おはよう」
起き上がり様にそう言うと、女性は顰めっ面で答えた。
「おはよう、じゃないだろ。もうお昼だぞ。早く支度して学校へ行け」
「飯抜きか？」
「当然だ」
「……」
俺は無言を返答に布団から出ると支度を始めた。
パジャマを脱ぎ、光坂の制服を着用する。
「そうだ、朋徳」
「ん？」
声に振り向くと、仏壇の前で女性が正座をしてこっちを見ていた。
女性の名は岡崎（おかざき） 智代。彼女は俺の母である。そしてその後ろに在る仏壇に置かれた位牌と写真は、今は亡き父、岡崎（おかざき） 朋也のもの。
父は俺が生まれる前、脳血腫の手術に失敗して他界した。母からはそう聞いている。
「お金渡すから帰りに買い物をして来てくれないか」
「何を買えば良いんだ？」
母は一枚のメモを俺に渡した。
受け取った俺はそれをポケットに突っ込む。
「解った、買って来る。じゃあ行って来ます」
そう言って俺はアパートを跡にした。

学校前の坂道。俺は何時も此処を上って学校に行く。
回りには誰も居ない。本来なら登校中の生徒達で賑わうのだが、この時間だ。俺以外に居る筈が無い。
「ん？」
居ない筈の道に、少女が居た。
光坂の制服だから、同じ高校の生徒である事は間違い無い。
そいつは俺の目の前で、脇に植えてある桜の木を眺めていた。
「何やってんだ？」
迷った挙げ句、俺は少女に声を掛けた。
「えっ？」
少女は驚いて振り向いた。
「遅刻だぞ」
「え、うそ！？」
少女は携帯を取り出して時刻を確認する。
「ヤバい、もうお昼だ」
言って少女は坂道を駆け上って行った。
その時、少女が身に付けていたヘアピンが外れて落ちた。
俺はそのヘアピンを拾ってポケットに仕舞った。
後で見掛けたら渡しておこう。

「遅ーい！」
学校に着き、教室に入った所でクラスメイトの少女が叫んだ。
長い紫の髪につり目の少女。このクラスの学級員長だ。名は柊（ひい）杏子（らぎ）。Ｌｖ５、ＨＰ１５０、攻撃力１５、守備力１０、素早さ１０、回避率５。武器は辞書類だ。なんて、辞書以外嘘だけど。
「全く、あれほど遅れるなって言ったのに遅れるなんて。こりゃお仕置きが必要ね」
その言葉に俺は顔が引き攣る。

「受けなきゃ駄目？」
「当然よ。放課後、校門前に来なさい」
言ってニヤニヤと笑う杏子。
ヤベえこいつ。何か企んでるぞ。
「何、何の約束？」
そう訊いて来たのは、黄色（おうしょく）ヘッドの男、春原（すのはら）　光平。
「光平、あんたには関係無いわよ」
「何だよ。教えてくれたって良いじゃん」
「しつこいわね。関係無いって言ってるでしょ」
言って杏子は懐から国語辞書を取り出す。
それと同時に春原の顔が引き攣る。
「僕、お邪魔だったみたいだね」
言って春原は窓際の一個手前の席に着いた。
「それよりあんた、お昼未だよね？」
「ああ」
杏子は腕時計を確認した。
「じゃあ一緒にパン買いに行かない？後１０分しか無いけど」
「キツイなそれ。行けるか？」
「走れば間に合うわよ」
「だな」
俺たちは教室を飛び出し、学食へと駆けた。

放課後、俺は春原の左隣に在る机に突っ伏していた。
「岡崎、帰ろうぜ」
黄色ヘッドが誘って来たが、俺は「嫌だ」と即答。
「って、何だアレ！？」
聞いちゃいなかった。
「岡崎、校庭見ろよ！」
春原の驚いた様な声に俺は渋々顔を上げて窓の外、校庭の中央を

見た。
暴走族らしき奴らが校庭でバイクを走らせている。
俺は徐に席を立った。
「行って来る」
「行くってお前、あそこにか！？」
「他に何がある。それにあんな所で暴れられたら嫌だからな」
言って俺は校庭に降りて行った。
校庭に着くと、そこには既に先客。一人の少女が奴らに向かって歩いていた。
俺はその少女の下に駆けて肩を掴んだ。
「おい、やめとけ！」
「その手は何だ？」
少女は振り向いて睨んだ。
「何だ、じゃねえ！女がでしゃばるなって言ってんだ！」
「心配してくれるのは嬉しい。でも私なら平気だ。それに、これは私が招いた事態だ。私に任せてくれ」
言って少女は微笑み、敵陣に踏み込んだ。
「お前たち、とっとと此処から出て行け」
言って少女は奴らを睨んだ。
「んだとコラァ！？」
敵の一人が少女に襲い掛かった。
その刹那、全ての敵が倒れた。
何が起こったのだろう。俺には何も見えなかった。
「おい、今何を？」
戻って来た少女にそう訊ねると正直に教えてくれた。
それは、襲い掛かって来た奴に回し蹴りを放ち、他の一人にぶつけて両方をノックアウト。そして残る敵共に飛び上がって頭に直下型ミサイルをお見舞いして倒した、と言う事だった。
「信じ難い話しだな」
「……そうか、信じてくれないのだな」

少女は俯き、校舎へと歩いて行った。

Ａｆｔｅｒ　１．出会い（後書き）

この度は、「智代アフターｓｅｃｏｎｄ～朋也が残したもの～」をお読み頂き、誠に有り難う御座います。次回更新は未定ですが、最後までお付き合い頂けると幸いです。Ｋｅｙ並に泣けるのを書きたいと思います。

After　2．従兄妹

昼休み、春原と共に昨日の少女に会い行った。
事の始まりは今から１０分程前。
「岡崎、それ食ったら昨日の奴の所へ行こうぜ」
俺が学食で買ったパンを頬張っていると、春原が唐突にそう言って来た。
「はぁ？　何で」
「何でって、可笑しいだろどう考えても。女が喧嘩で男に勝てる筈が無い。だから確かめに行くのさ。あいつが女かどうか。確か、１年の坂上（さかがみ）智香だったかな」
と言う訳で今、１年の教室が並ぶ廊下に居るのだ。
「春原、あいつじゃねえか？」
言って俺はＢ組の教室に入ろうとしている少女を指差した。
グレーの長髪にバンダナ。正しく俺が昨日見た少女だった。
「おい」
少女、坂上　智香の下に行って声を掛ける春原。
「何か用か？」
智香は振り向き様に訊ねる。
「昨日のあれ、ヤラセだろ？」
直球で訊くのか春原。
「ヤラセ？　何の事だ」
「だから昨日のだよ。放課後、バイクに乗った連中倒しただろ？」
「ああ、あれか。それがどうした？」
「ヤラセなんだろ？　女が男に勝てる筈がありません。大方、金でも渡して負けて貰ったんだろう？　それともあっちの方か？　女は良いよなぁ。バカな男共はそう言うので何でも言う事聞いちゃうんだから」
そう言って春原が笑っていると、辺りから話し声が聞こえてきた。

「誰あの子達？」
達？
「確か2年の不良よ。岡崎と春原」
俺も含まれてんのかよ！？
「何だか知らんが、お前は私に喧嘩を売りに来てるのか？」
「ああ、その通りさ」
「……喜べ、同校の生徒には手を出すまいと思っていたんだが、お前だけは特別に相手をしてやろう。そもそもお前自身、素行の悪い不良生徒の様だからな。そうお咎めも無いだろう」
「ああ、無い。思いっ切りやってくれ」
「お前どっちの味方だよ！？」
「少なくともお前の味方じゃあ無いね」
「言ってろ。直ぐに見直させてやるさ。惚れるなよ？」
気持ちの悪い奴だ。
「何時でも来いよ」
と構える春原。
「一応、正当防衛にしたいからな。掛かって来てくれ」
「ふっ、後悔すんなよ！」
「ああ、しない。自身あるからな」
「いい気んなってんじゃねえよ！　死ねやー！」
斬られ役の様なセリフを吐いて春原は智香に襲い掛かった。
智香はひらりと身をかわし、春原を蹴り上げて連続キックを繰り出し、最後に飛び上がって踵落としを放った。
「うっ！」
床に叩き付けられた春原は呻き声を上げた。
この時、俺は思い出した。噂に聞いた事がある。かつて、この町にとんでもなく強い女が居た、と。夜の町を徘徊しては、一般人に迷惑を掛けたがる頭の悪い連中を狩って歩いていた、と。月明かりの下で見る彼女は、ただただ恐ろしく、ただただ美しかった。
「――と言う噂だ」

「やられる前に言えよ！　……って、それ２０年くらい前の伝説なんですケド。つーかあの野郎！」
春原は立ち上がった。が、既に授業中とあって、相手は姿を消していた。
「それにしてもお前、凄え格好悪かったからな」
「クソッ、放課後リゾンベだ！」
恐らく、リベンジと言いたいのだろう。
「と言うわけで放課後付き合え。それまで僕は体を温めておく」

放課後、俺たちは人気の無い旧校舎の廊下で、智香と対峙していた。
「何なんだ、こんな場所まで呼び出して」
「此奴、俺のダチで春原ってんだ。一寸だけで良いから此奴の話し聞いてやってくれよ。お前に対する素直気持ちを伝えるから」
嘘だけど。
「今からコクるみたいなシチュエーション作るなよ！」
「……？」
頭に疑問符を浮かべる智香。
「先刻はよくもやってくれたな」
「やったも何も、吹っ掛けて来たのはそっちだろ」
「へっ、そんなの関係無え！　要は結果だ」
「此奴、バカだろ？」
「ああ」
「二人、意気投合するな！」
「まあ、落ち着け春原。深呼吸だ」
俺に言われて素直に深呼吸をする春原。
「って、誰が慌てさせてんだよ！？」
俺です。
「くそう、啖呵が無茶苦茶だ！　もう良い。先刻は腕が鈍っていた

だけだが、今は違うぜ」
「懲りない奴だな。差は歴然だっただろ。その差が短時間でどう詰まる？　やめておけ」
年下の女生徒に諭される春原。
「ちっ、舐められたもんだな」
あれだけ一方的にやられているのだから無理も無い。
「まあ、聞けよ」
「何だ？」
「車間距離空き過ぎるとな、速い走り屋だって追い抜けねえんだよ！」
春原、とても格好悪い例えだそれは。
「頭〇字Ｄの８６を見ろ。峠での連戦連勝、あれこそ僕の戦い方だね！」
もうやめとけ。付いていけない。
「このバカは何が言いたいんだ？」
智香が心苦しそうに俺を見た。
「悪いがそいつとは無関係なんだ、俺」
「ありまくるだろ！　つーか人が話しをしてる時に余所見（よそみ）をすんじゃねえよ！」
「口上が長いんだ。要点だけ言え」
「ちっ、つまりだ、先刻は腕が鈍っていただけ、と言う事だ！」
「……それ先刻言ったじゃないか」
「あれ？　って良いんだよ！　なんべんも言いたいんだよ、言わせろ！」
「悪いがお前みたいなしつこい奴は何人も見てきた。けど、結果は同じだった。悪い事は言わないからもうやめておけ。それとも何だ。学校に来られないぐらいにならないと気が済まないのか？」
この状況でそんなセリフが出るのか。
「……」
その落ち着き様を前にしてか、喧嘩を売りに来た春原が焦り始め

た。が、此処まで来て彼も引けない。精一杯頑張ってみせる。
「学校に来れなくなるのは、さて、どっちかな」
その言葉に俺は「お前だ」と言ってみる。
「回答すんなよ！」
「おい、そこの部外者の様でいて、関係者」
俺は自分を親指で指し示した。
「そうだ。弁護してくれ、正当防衛だったと」
「ああ、良いぜ。これから先、幾らだってな」
「よし、良いだろう。なら、相手してやる」
「凄え自身だな、おい」
「どうして欲しい？　暫く地上の者では無くしてやろうか」
「面白そうだな、それ」
「そう言うのは得意だ、任せておけ」
「んな事出来るかよ！　まあ良いや。ツベコベ言ってねえで掛かってきやがれ！」
「ああ」
智香が一瞬で春原の目前まで駆けた。
「えっ、クソ！」
春原が手を伸ばす。
それを擦り抜けてその懐に智香は居た。
疾走により充分に溜められた力を蹴りに込めて放つ智香。
「おお、飛んでる飛んでる」
「関係者、ダストシュート！」
「え？　ああ」
俺は廊下の壁に設置してあるダストシュートの蓋を咄嗟に開いた。
「はっ！」
智香の最後の蹴りで見事にその開かれた穴へ春原は突っ込まれた。
「うわっ、助けてくれ！」
辛うじて指で支えている春原が震えながら命乞いをする。
智香はそんな春原に近づいて指を掴む。

「これ、外すと落ちるがどうする？　そうか、落ちたいか。解った」
「僕、何も答えてないッスよね！？」
智香は春原の指を徐に外した。
「容赦無しッスか！？　って、うわああぁぁぁぁ！」
断末魔が遠ざかって行った。
智香はすっくと立ち上がる。
「……拙い、死んだかも」
「否、あいつなら大丈夫だ」
俺はダストシュートの中を覗き込んで大声を出した。
「春原、上がって来れるか？」
「無理だよ！」
「煽ててやろうか？」
「僕は豚ッスか！？」
ガタン――俺は蓋を閉めると立ち上がり、智香の方を向いてグッと親指を立てて微笑んだ。
「ふぅ、安心した」
「つーかあいつは化け物か？」
「ふふっ」
「はっはっはっ！」
二人で青春ドラマの様に笑い合う。
「まあ、これであいつも懲りただろ」
「残念ながらこんな事で懲りる様な奴じゃないぞ」
「だとしたら迷惑だ。辞めさせる様に言ってくれ」
「俺の言う事を素直に聞く様な奴なら良いんだけどな」
「友達じゃなかったのか？」
「さあな。それはどうだろう。あいつの暴走を見るのが楽しくて一緒に居るだけだし」
「と言う事は、こんな事が未だ続くのか」
「あいつが飽きるまでな」
「厄介な事に巻き込まれたものだな」

「まあ、本当に困ったら言ってくれ」
「既に充分困ってるぞ」
「未だ未だ余裕がある様に見えるが」
「ふぅ……」
汗を掻いていないかを確かめる為か、智香はタートルを引っ張って鼻先を突っ込んだ。
一つ深呼吸した後、襟を戻す。
「だけどな、お前達を見ていると懐かしい感じもする。そうやって無茶が出来る事も良いと思う」
お前もな。
つーか、今思ったが坂上って……。
「もしお前に少しでも良心があるなら、あいつを止める様にしてくれ」
「気が向いたらな」
「うん、期待しているぞ」
そう言って去って行こうとする智香を「一寸待った」と俺は引き留めた。
立ち止まり、振り返る智香。
「未だ用か？」
「お前の姓、坂上だったよな」
「そうだが」
「一つ聞いても良い？」
「ああ」
「お前の父親って、鷹文って言わないか？」
「えっ、何故それを？」
「鷹文さんには姉貴が居るのは知ってるよな。その姉貴が俺の母さんなんだ」
「その母さんと言うのは、岡崎　智代さんか？」
俺は頷く。
「と言う事は、私とお前は従兄妹（いとこ）だと言う事だな」

「そう言う事だ」
「うん。じゃあ、私は失礼するぞ」
言って智香は去って行った。
ガタン――ダストシュートの蓋が開き、春原が出て来る。
「お前は猿か？」
「人間ですケド。つーか、普通、ダストシュートって人が入れない様に出来てんじゃないの？」
「関節外されてたんじゃないのか？」
「そんなんで入るのかよ！？　つーか・・・」
春原がダストシュートから完全に抜け出して顔を寄せて来る。
「何だよ？」
「あいつ、マジで強いぜ」
「ああ、俺は前から気付いてた。まあ、伝説の女は実在したって訳だ」
「しねえよ！　て言うかその伝説、２０年くらい前のだろ！？　有り得ねえよ！　計算合わねえよ！　それより、女が男より強いなんて有り得ません」
「お前、全国の女性を敵に回してるからな」
「だって、あんな見てくれだぜ？」
「まあ、あの智香って言う女に関しては同感だけどな」
母さんもだけど……。
「だろ？　何か理不尽だ。……もしかしてさ」
「何だよ？」
「あいつ、男なんじゃない？」
「春原……俺はお前の命が心配になってきた」
「どうして？」
「あいつの前で同じセリフ言ってみろ」
俺がそう言うと、春原は考え込んだ。
恐らく、自分が智香に蹴られ、空中を舞い、トドメを刺されて火葬されている所を想像しているのだろう。

「……やめておこう」
「灰は嫌か」
「そこまで想像するか！　慌てて棺から飛び出した所までだ！」
「それ、生き返ってるじゃん。設定に無理があるぞ」
「え、そうかな？」
「大人しく燃えろ」
「んな事はどうだって良いだろ！　兎に角、僕は確かめる！」
「灰からの蘇生は可能か、をか？」
「そんな恐ろしい事身をもって確かめるか！　あいつが男か、だよ」
「あいつって、智香か」
「ああ」
「どうやって？」
「幾らだって方法はあるだろ。解るまで確かめてやる」
「この時の春原は未だ気付いていなかった。自分が変態への道を歩いていると言う事に」
「丸聞こえなんですけど」
「今のは聞かなかった事にしてくれ。その方が楽しいから」
「そんな変態まがいな事するかよ！　何、巧くやるさ」
「精々無事で居ろよ。結果報告は聞きたいから」
「見くびるなよ」
ボロクソにやられた奴のセリフとは思えなかった。取り敢えず此処は、やる気を削ぐのは止そう。
俺は春原に向けて親指を立てた。
「グッドエッチ！」
変態を祈る、と言う意味を爽やかに言ってやった。
「おう！」
春原は健闘を祈られていると思い込んで同じく爽やかに答えてみせた。

ＡｆｔｅｒＳ．智香の胸は本物（前書き）

親子二世代に渡って同じ事しちゃいました。流石、岡崎&春原、そして坂上の子ども。

After　3．智香の胸は本物

翌日、俺が真面目に登校すると、春原が来ていた。
「やあ、遅かったね！」
「……お前が遅刻せずに来ている？　そんなバカな。これは夢にに違いない、殴ってみよう」
ガスン！――春原の頬を一発殴ってみた。
「痛！　自分の頬抓れよ！」
「現実だったら痛いじゃん」
「僕も痛えよ！」
「つーかお前、何で居るの？」
「そりゃあ、このまま汚名を被ったままじゃ居られないからね」
「え、どの汚名？」
「まるで沢山あるみたいですね。勿論、女に負けたって汚名だよ」
「それか」
「今日はあいつが男だって証明してやるよ」
「その為にこんな早く来たのか。で、どうやって確かめるんだよ？」
「何気に男だと確証を得られる質問を振ってみる」
「例えば？」
「髭剃り貸してくれよ、とか」
こいつにとってはそれが何気ない質問なのか。
「で、その質問をどうやって自然な流れで会話に盛り込むんだ？」
「んなもん、どうとでもなるさ。まあ見てなって」
言って春原は意気揚々と教室を出て行った。
俺も鞄を置き、その後を追う。
「朋徳」
今、誰か俺を呼んだか？　まあ良いや。

一階に来ると、春原は登校して来て間もない智香を捕まえた。
「何だ？　これでも忙しいんだ」
「えっと、今日はその、喧嘩を売りに来たんじゃ無いんだ。少し歩いて話さないか？」
智香の目が俺に向く。この男は何を企んでいるんだ、と。
俺は、さあ、と肩をすくめてみせる。
「歩かなくても良いだろ。此処で話せ」
「え、此処で？　ま、良いか。ええとだな……」
「早く言え」
「今朝はさ、寝坊して参っちゃったよ」
言って最後にてへと笑う春原。
「キャラが変わってないか、お前」
「それでさ、髭を剃ろうと思ったら、髭剃りが刃こぼれしてて、イテテッてなっちゃったよ」
「そうか」
「で、悪いんだけどさ、お前の髭剃り貸してくれない？」
「どうして私が貸さねばならない」
「やった、掛かった！」
一人喜んで飛び跳ねる春原。
「聞いたよな、岡崎」
「ああ、聞いたが……」
「何だ、何の騒ぎだ？」
「今、私が、って言ったな！」
「言ったが、何が悪い」
「つまり、お前は髭剃りを持っていると言う事だ。と言う事は」「持ってる訳無いだろ」
少し間を置いて「え？」と疑問符を浮かべる春原。
「私が、と言ったのは、お前に私の所有物を貸してやる義理が何処にある、と言う意味だ。そもそも……」
「そもそも？」

「女性にそんな事訊くのは失礼だろ！」
言って智香は回し蹴りを放った。
もろに喰らった春原が俺の真横を通り過ぎ、壁にぶつかって落ちた。
「死ぬわ！」
と起き上がった春原の顔が凹んでいるのは気のせいだろうか。
「お前、何か変だぞ」
「何が？」
「凹んでる」
「凹んでなんかいなさ。僕は何時だって強気さ」
「正当防衛だ」
「嘘吐け！」
「うん、正当防衛だ」
「こら、懐柔されてんじゃない！」
「あまり私の神経を逆撫でするんじゃない。思わず手が出てしまうじゃないか」
そう言って智香は教室に入って行った。
「失敗だったな」
「クソー」

そして一限が終わって休み時間。俺たちは再びやって来た。
「本当にしつこい奴だな」
「違う、今回は何もしない。会いに来ただけなんだ」
「信じられないぞ」
「智香ちゃんって意外に美人だからな」
「思ってもみない事を言うな」
「いやぁ、目の保養になるなぁ！　おっと、もうこんな時間。次の授業が始まるな」
「ああ、急いで戻った方が良い」

「あっ、しまった！　次の授業で使うおっぱい忘れた！　智香、お前のおっぱい貸してくれ！」
「どうして？」
「やった、掛かった！　どうして、って訊くと言う事は、お前のおっぱいは貸せるんだな！　外せるんだな！？」
「外せる訳無いだろ」
「ありゃ？」
「そもそも……」
「そもそも？」
「おっぱいを使う授業があるかー！」
言って智香は春原を蹴り飛ばした。
「死ぬわ！」
起き上がった春原の顔が宇宙人のそれに見えるのは俺の気のせいか。
「お前、春原か？」
「当然でしょ。変な事訊くなよ」
「スマン、何か別人の様に見えたからさ」
「何言ってんの。寝ぼけてるんじゃないの？　まあ良いや。教室戻ろうぜ」
「正当防衛」
「うん」
「この、トモトモコンビがー！」
春原は捨て台詞を残して駆けて行った。
「そう言えば、下の名前訊いてなかったな」
「朋徳だ」
「有り難う」
礼を残して智香は教室に入って行った。

次の休み時間、俺たちは再三やって来た。

「いい加減にしろと言っただろ」
「否、今回は違うぞ」
「何時も、そう言って結果は同じじゃないか」
「今回は違うんだ。今回はなあ！」
いきなり智香に飛び掛かる春原に蹴りが入った。
「疼（痛い）！」
春原は思いっ切り壁に叩き付けられた。つーか、何故に中国語？
「大丈夫か？　思わず本気で蹴ってしまったじゃないか。痛かっただろう。だからもうよせ」
春原は「ペッ」と血痰を吐き捨て、むくりと起き上がった。
「へっ、一寸付き合えよ」
「何にだ？」
「良いからさ。一寸、そこまでだ」
「……」
「ほら、来いよ」
春原が歩き出す。
「仕方の無い奴だな……」
智香が彼の後に続く。
暫く行った先で二人は角を折れた。その先にあるのは男子トイレ。
どぐしっ！――遠くで春原が舞った。
「何をしたいんだお前達は！？」
ボロ雑巾の様になってしまった春原を引きずって戻って来る智香。
「挙げ句の果てには男子トイレに連れ込もうとする。嫌がらせにも程があるぞ」
「そいつはただ単に確かめたかっただけなんだ。お前が女かどうかをな」
「……そうか」
智香は俯いてしまった。
「そんな屈辱的な事を言われたのは始めてだぞ」
「俺は関係無いぞ。確かめたかったのは春原だ」

「お前も確かめたかったくせによ」
「うわっ！」
突然、復活した春原に驚く俺。
「つーか知りたくないし。そもそもどう考えても女の子だろ」
「だってお前、僕にグッドエッチって……。って、エッチ！？　ラックじゃない！」
「そうだ。最初からお前の変態振りしか期待していなかったって事だ」
「ハメられた！」
「まあ、悪かったよ。でも、もう充分ウサは晴らせただろ？」
俺は智香をそう宥める。
「……気に食わない」
「あん？」
「なら、ちゃんと確かめてみれば良いだろ。来い」
智香が俺の手を掴む。
「何だよ？」
「あの男は嫌だが、お前なら我慢してやろう」
怒りに任せて俺を引いて行く。
人気の無い場所まで来て、漸く智香は俺を解放した。
「まあ、落ち着け」
「一寸やそっとで落ち着けるものか。物凄くショックだったんだぞ……。私はこの学校に入ってからは普通の女の子として振る舞えていると思っていたんだ」
「そりゃ物凄い感性だな」
「え？」
「お前の過去が壮絶過ぎるんだ。その過去と比べれば、そりゃしおらしくもなったんだろうけど」
「知ってたのか」
「昨日、母さんに訊いた。ありゃ全部本当なのか？」
「どんなものかは知らないが、大概、本当の事だろ。荒れてたんだ、

ずっと。けど、もう昔の自分じゃない。違うつもりでいたんだ・・・」

けど、そうじゃなかったと俺たちに気付かされた。

まあ、そりゃショックだろうな。

「グラウンドで暴れてたじゃないか。あれを辞めろ」

「あれは仕方が無かったんだ。あいつらは私を探していたんだからな」

「お前、早速何かしでかしたのか」

「違う、何もしてない。注意しただけだ。真夜中に家の前でバイクをバリバリ鳴らせていたんだ。普通の事だろ？」

「普通の女子学生はそんな事しないと思うが……」

「凄く五月蝿かったんだぞ？　住人が迷惑してたんだ」

「ああ、解った解った」

「そうしたら、顔覚えられて、学校まで付いて来た。放っておいたら何時までも私を待って、他の生徒にも迷惑を掛ける事にもなってしまっただろうからな。それで、私が出たまでだ。どうだ、仕方が無かっただろ？」

「普通の女子学生は教師に任せると思うが……」

「それも悪いだろう。人の為とは言え、私が引き起こした事だからな」

こんな奴に何と言ってやれば良いのだろうか。

「前途多難だな」

それしか思い浮かばなかった。

「何がだ？」

「お前が普通だと思ってる事は、悉く普通の女の子の常識から外れている」

「……これでも努力していたつもりなんだがな。けど、もう少しやんわりと言って欲しかった。これでも傷つき易いんだぞ」

「それは失礼。口が悪いもんでな。そもそも、そんなまともに振る舞う努力をして何がしたいんだ？」

「良く聞いてくれたな！」
態度を一変させて唐突に目を輝かせる。
「私は男子にモテたくてこんな事をしている訳じゃない。私には目的がある。最後の目的は言えないが、当面の目標は言える」
「勿体ぶらずに言えよ」
「ああ。生徒会に入る事だ」
「洗面器？」
「入りたいと思うか、そんな物に。そもそも小さすぎるだろ」
「ああ、そうだな」
「洗面器じゃない。似ているが違う」
「バケツ」
「それでも小さいだろ」
「ポリバケツ」
「うん、入れるな。それなら……って、全然違う！　生徒会だ、せ・い・と・か・い！」
「……マジ？」
「どうしてそんな表情をする」
「どんな顔してる？」
「そんな奴とは関わりたくないと言う表情だ」
「これでどうだ」
「そんな奴とは関わりたくないと言う表情を必死で隠している表情だ」
「嘘は吐けないね、俺」
「そうか」
智香は残念だとばかりにあからさまに肩を落とした。
「どうした？」
「お前はどうしてか話し易い」
「全然話して無いぞ。殆ど春原相手じゃん」
「じゃあ雰囲気だ。クラスの連中や寄って来る奴には無い、何と無く話し易い雰囲気だ」

「そりゃどうも」
「そんな奴に関わりたくないと言われると落胆もする」
「でもその落胆は正しい」
「妙な事を言うな」
「だって、この学校じゃ俺は正しくない生徒だ。その正しくない生徒が言う事に落胆すると言う事は、お前は正しいって事だろ」
「成る程、お前は正しくない生徒だったんだな」
「高校生にもなってこんな事して遊んでんだから、そりゃ正しくないだろ」
「可笑しいとは思ってたんだ。お前みたいなのが、自分以外にもこんな学校に居るなんて思わなかったんだ。この落ち着く感じはその所為か」
「まあ、昔のお前程酷くは無いけど、確かに似た者同士だろうな。でも実際、生徒会を目指すんなら、俺なんかに構わない方が良いぞ。教師に目付けられたら困るだろ」
「生徒会に教師は関係無いだろ」
「まぁ、そうかもしんないけどさ。生徒会の人間と知り合いなんて、ゾッとするよ、俺は」
「未だ違う」
「だな」
言って俺は歩き出す。
「けど、無理に縁を作る事も無いだろ」
「何処へ行く？」
「何処って、戻るんだけど。急がないとチャイム鳴るぞ」
「未だ確かめて無いじゃないか」
「何を……って、まさか？」
「そうだ、私が女であるかどうかだ。触って確かめてみれば良い」
「正気か？」
「当然だ。これは意地だからな。屈辱的な事この上無かったんだぞ」
「否、お前女だって。どっからどう見ても」

「違うかも知れないぞ？」
「否、違わないが。けど、此処で調べずに納得されても後味が悪い。納得いかない」
「春原には触った事にしておくよ」
「そうやって嘘を吐かれるのが嫌なんだ」
「触って欲しいのか？」
「そんな訳あるか！　まあ、何だ。私たちはその、従兄妹なんだし、多少の事は……って、やはりそれも無理だ！」
「複雑だな」
「複雑……そう、女心は複雑と言う奴だ。これは、女の子らしくは無いか？」
俺は無視して歩いて行く。
「おい、朋徳。訊いているんだぞ。女心は複雑と言うじゃないか」
「ああ、言うな」
「なら、今の私は女の子らしい、と言う事になる」
「ああ、なるな」
「お前、バカにしてるな？」
俺は足を止め、智香の服の中に手を突っ込んで胸を触った。
「なっ！？」
顔中を真っ赤に染め上げる智香。
「柔らかくて温かい。本物だ」
「ば、バカ！」
智香は俺の手を引っこ抜いて飛び退く。
「いきなりで吃驚しただろ」
「悪い。でもこれで証明出来たよ。お前が女の子である事」
言って俺は智香を残して教室へと戻った。
「どうだった？」
と顔にモザイクの掛かった春原が訊いて来る。
「そんな事より病院行けよ。顔にモザイク掛かってるからな。因みに柔らかくて温かかった。本物だった」

「マジかよ！？　クソー！　って、女だと悔しがってるのか、自分が男として悔しがってるのか、よく判んねえ！」
「お前、それどころじゃないからさ」

After　4．哀れな春原

「朋徳、起きろ」
体を揺さぶられ、目を覚ます俺。
「おはよう、母さん」
「おはよう。と言うかギリギリだぞ、お前」
「え？」
俺は傍らにある置き時計をチェックした。
現在、８時４５分。ＨＲ開始まで後１５分しか無い。
「うわあ、拙い！」
俺は布団から飛び出ると慌てて支度をしてアパートを飛び出し、光坂高校に向かった。
その途中、幼稚園の前で、後ろからバイクが突っ込んで来た。
「うわあああああ！」
俺は悲鳴を上げて放物線を描きながら宙を舞って地面に叩き付けられて数回転がった。
「ゴメンネ、朋徳。怪我しなかった？」
その声の主はあの苦手な女、柊　杏子だった。
「謝って済む問題かよてめえ！　人身事故だぞ！　つーか、バイクなんて校則違反だろうがよ！」
「五月蝿いわね。轢き殺されたいの？」
「すみません……って、何で俺が謝ってんだよ！？　てかお前、撥ねたんだから責任持って乗せてけ！」
「嫌だ」
言って杏子はバイクを走らせて去って行った。
あの女、何時かシメてやる。

学校の前の桜の木が植えてある坂道で、俺は立ち止まった。

そこにあの少女が居たからだ。
「よう。急がないと遅刻するぜ」
声を掛けていた。
少女は俺の声に気付き、振り向いた。
風に靡(なび)く赤い髪に円らな瞳。
俺はその少女を可愛いと思った。
「行こう、一緒に」
言って俺は少女に手を差し出した。
少し躊躇って、徐に手を掴む少女。
「時間が無い。走れるか？」
「はい、少しなら……」
「じゃあゆっくり走ろう」
言って俺たちは坂を上り始めた。

一時間目が終わると同時、春原が登校して来た。
「今日も早えな」
「当然。このままじゃ済ませられないからね」
鞄を置くなり、身を翻す。
「行くぞ、ドベンザだ！」
度便座……度重なる便座の略。意味は、四六時中便器に座って用を足す、と言う所か。
「春原、頑張れ」
「おう」
「あと、復讐はリベンジな」
「え、復讐ってドベンザじゃないの？」
「度便座は度重なる便座の略。四六時中便器に座って用を足す、と言う意味だ」
「え、マジ！？」
「嘘だ。そんな言葉無い」

「なっ、てめえ！」
「それより行くんだろ？」
「ああ、そうだった」
「もうやめないか？　お前、勝てないって」
「そりゃ、まともにやりあったらな。別に真剣勝負をしようって訳じゃない。頭を使えば勝てる方法なんて幾らだって浮かぶもんだぜ」
それを勉強に使って貰いたいものだ。
「まあ聞けよ。良い作戦があるんだ。話しながら行こうじゃないか」
言いながら春原は一人教室から出て行く。
「付いてきてくれよ！」
戻って来た。
「何だよ、タルい」
「まあ聞けよ。良い作戦があるんだ。話しながら行こうじゃないか」
「同じセリフを言うな」
「その作戦とは……心理作戦だ！」
「無理して難しい言葉を使わなくて良いぞ」
「難しくねえよ！　良いか？　ちゃんと聞け岡崎」
がしりを肩を掴んで迫る春原。
「ああ、聞いてやる。だがその前に放せ、キモイから」
「そもそもあいつがどうして真面目振ってるのか、それを考えたんだ」
言って歩き出す春原。
俺はその彼の隣に着いて歩く。
「男だ」
春原が意味不明な事を言い出した。
「はあ？」
「あいつも女の端くれだ。あの歳になればそりゃ異性に興味を持ち始めるだろうさ。つまりあいつは、この学校に素敵な彼氏探しに入学したって訳だ」
「中学でも探せるだろ」

「やっぱ頭が良くて将来性のある奴が良いんだろう」
「もう将来設計入ってんのかよ」
「だから異性を意識しまくってる筈だ。そこが弱点と言う訳だな」
「で、具体的にどうすんだよ？」
「色仕掛けさ。僕が智香を煽ててその気にさせる。これでもうあいつは骨抜き状態。戦闘不能って訳だ」
「お前、アホな子だろ」
「何でだよ！？　良い作戦じゃんか！」
「ま、勝手にやってくれ」
「否、そう言う訳にはいかないんだ。此処でお前の出番なんだよ」
「はあ？」
「お前、あいつと親しげじゃないか」
「お前よりかはな」
「だったらレクチャーしてくれよ。どう口説いたら智香が骨抜きになるか」
　母さん、こいつ本当にアホです。そんなものが解るなら女を作るのに誰も苦労はしない。
「知るかよ、そんな事」
　踵を返して教室に戻る。
「何でだよ！？　手伝ってくれよ！」
「やるか否かの問題じゃない。知らないの。ユーアンダースタン？」
「ノーノー、アフガニスタン」
「アフガニスタン行って来い」
「何でだよ！？」
「自分で言ったんだろうが」
「手伝ってくれよ、岡崎。俺たち友達だろ」
「悪い、友達だと思って無えや」
「思えよ！　まあ良い。なら作戦練り直しだ」
「自力で落とす自身は無いのな、お前」
「言ってくれるじゃねえか。そりゃ普通の女の子ならものの数秒で

口説いてみせる自身はあるさ。けど、相手をよく考えろ。価値観が違い過ぎる」
「そうだな。お前と価値観の合う奴って言ったら妖怪ぐらいだもんな」
「僕の方じゃねえよ！」
「今度、猫人間紹介するな」
「凄い人と知り合いですね」
けど、面白そうだったから俺は引き受ける事にする。
「そこまで言うなら仕方が無いな」
「おう、頼む。巧くやってくれよ、マジで」
１年の教室前に着くと、春原はＢ組に入って行こうした女生徒を呼び止めて智香を呼んで貰う様に頼んだ。
暫くして、智香が姿を現した。
「何だ、またお前か。もう良いだろ」
目を細めて春原を見詰める。
「否、違う。お前の見方が変わったんだ」
「どう言う意味だ？」
俺はソッポを向いたまま春原にだけ聞こえる様に囁く。
「（春原、先ず最初に身に着けている物を褒めろ。次に制服だ）」
「その頭に着けているの、似合うな」
智香は頭に着けているバンダナを手で触れた。
「そうか、有り難う」
「その制服も似合うよな」
「そうか、有り難う。と言うか気持ち悪いぞ、お前」
「（照れているぞ。良い調子だ。好感度が３０まで上がった）」
「（何の数字だよ？　）」
「（よし、じゃあ、背伸びをしながら自然に『あー、智香ってこんなに美人だからモテるんだろうなー』って言え）」
「（無茶苦茶不自然だよ！　）」
「（良いから言え）」

「くそっ」
「どうした？」
「こっちの話し」
春原が大きく深呼吸をした。マジで言うつもりだ。
「あー、智香ってこんなに美人だからモテるんだろうなー」
「何なんだ、先刻から一体。素直に褒めてくれているのか、それとも貶されているのか、判らないぞ」
「（何か知らんが想像以上の結果だ）」
「（マジかよ！？　）」
「（次に腹筋しながら自然に『あー、何だか僕、無性に彼女募集中ッス』と言え）」
「（腹筋してる時点で不自然だろ！？　）」
「（智香にとってはそれが自然なんだよ）」
「マジかよ！？」
「何がだ？」
「否、こっちの話し」
春原はそう言って廊下に寝そべった。マジでやるらしい。
「あー、何だか僕、無性に彼女募集中ッス」
春原は腹筋をしながらそう言った。
「って、このセリフも何だか可笑しいだろ！」
「ちゃんと言え」
「文として変だっただろ、今のは！」
「細かい事は気にするな」
「……」
「（お陰で効果が無かったじゃないか）」
「（僕が悪かったのかよ……）」
「用がないなら帰るぞ」
「（拙い。此処ぞとばかりにズボンを脱いで相手を引きつけろ）」
「よし……って、引くわ！」
「可笑しな奴だな」

「（じゃあ最後に殺し文句だ。ボウリングの投球ポーズで『智香さん、これから毎朝、僕の朝食を作って下さい』と言え）」
「（よし！　）」
春原がボウリングのボールを胸抱えるポーズを取った。そしてそこから数歩助走した美しいフォームで投球した。
「智香さん、これから毎朝、僕の朝食を作って下さい！」
言って直ぐ、俺の下に戻ってくる。
「って、このポーズに意味なんてあるのか！？」
「大して無い」
「ならやらせるなぁ！」
「おい、お前。春原とか言ったな」
「ああ？」
智香の言葉に春原が振り向いた。
「もしかして、お前、私に気があるのか？」
え、効果有り？
「ぼ、僕じゃ駄目ですかね？」
「春原、こっちに来てくれ」
春原が智香に近寄っていく。
智香は春原の唇に自分の唇を重ねる……と見せかけて鳩尾に拳を捩じ込んだ。
「ごふっ！」
呻き声を上げる春原。
「ふんっ」
そして渾身の蹴りによって彼の体がこっちに向かって飛んできた。
「ふんっ」
俺は智香に向かって蹴り返した。
コンボが繋がった！
「何！？」
智香は春原に連続蹴りをお見舞いし、最後に回し蹴りで吹っ飛ばす。

「死ぬわ！」
春原が俺の方に飛んで来る。
「悪い、蹴り返されたら、止め所が判らなくなってしまった」
俺はひょいっと身をかわす。
春原は廊下を滑って行き、突き当たりの壁で頭をぶつけて漸く止まった。
「死ぬわ！」
直ぐさま起き上がって戻って来るとそう怒鳴った。
「凄え元気な」
「ねえ、あなた！」
見知らぬ女生徒が智香の下に駆け寄って来た。
「私か？」
「そう、あなた、部活入ってる？」
「否、入っていないが」
「それじゃあ柔道しましょうよ！」
どうやら、智香の運動神経に目を付けての勧誘だった。
「あなたが居たら全国が見えるかも！　なんて逸材なのかしら！」
「入らない」
つれなく立ち去ろうとする智香。
「そんな、待ってよ！」
「入らないと言ってるんだ」
「直ぐにとは言わないわ！」
「諄(くど)いぞ」
騒がしく言い合いをしながら、二人は廊下を歩いて行った。
「いい気になりやがって……！」
「普通に迷惑している様に見えたが」
「ああ言うのを天狗って言うんだ！　次遭った時には覚えておけよ！」
「全然聞こえてないからな。電話して言ってやろうか？」
俺は携帯を取り出して智香の携帯にコールする。

春原の顔が段々と引き攣り始めた。
「お、岡崎くん、何時番号をゲットしたのかな？」
「黙ってろ……」
待ち受け音が数回鳴り、智香が応答する。
「あ、もしもし？　春原だけど」
と俺は春原ヴォイスで言った。
「春原……何故お前が私の番号を知っている。と言うか、この番号、朋徳のだろ」
「そんな事はどうでも良いんだよ！　次遭った時には覚えておけよ、この天狗女！」
「何？」
ブツッ！――電話が切られたのと同時に、智香が目を血走らせながら廊下を走って来て春原に跳び蹴りを放った。
「うおわっ！」
春原は勢いよく吹っ飛んで突き当たりの壁に激突して頭がめり込んだ。
「大丈夫か春原！？」
そう叫んだ後、俺は智香の方を向いて、片手を顔の前に出して頭を下げた。
「スマン、今の電話俺なんだ」
言った刹那、智香が俺の懐に移動した。
どぐしっ！――彼女の蹴りで俺の体が宙に舞い、そして落下する。
「スマン、朋徳。大丈夫だったか？」
「効いたぜ、今の。春原もこれ喰らってるのな」
言って苦笑いを浮かべる俺。
「否、あいつには本気でやっている。今のは手加減したんだ」
「そうかよ」
俺は立ち上がると歩き出す。
「何処へ行くんだ？」
「教室」

「春原は良いのか？」
「引っ張り出しといて」
「嫌だ」
「あ、そ」
その後、放課後まで春原に会う事は無かった。

Ａｆｔｅｒ　５．交際するんですか！？

休日。
暇な俺は春原の部屋に来ていた。
春原は居ない。
寮母の相良（さがら）　美佐枝さんの話しでは、買い物に出掛けているとの事。その為俺は、こうして春原の部屋で待っているのだ。
ガチャ――ドアが開き、春原が入ってきた。
「あれ、誰か居る」
俺は春原に見つかる前に炬燵（こたつ）に隠れた。
トコトコと春原が足音を立てながら近付いて来る。
頃合いを見計らって、俺は春原の足を掴んだ。
「うわあああ！」
悲鳴を上げる春原。
「よう」
俺は炬燵から顔を出した。
「何だ、岡崎か……って、何で居るんだよ！？」
「それ、こっちのセリフ」
「此処、僕の部屋なんですけど……」
「んな事知ってるよ。それよりお前、何処行ってたんだ？」
「ん？　ああ。買い物だよ。今週号のウェンズデイを買いに行ってたんだよ」
「ふーん。読まして」
俺は春原に手を差し出す。
「嫌だよ！　何で僕がお前に貸さなきゃなんないんだよ！？」
「友達が読みたいって言ってるのに貸さないのかよ。これはもう絶交だな」
「……わ、解ったよ」
春原は渋々了解して俺に買ったばかりの雑誌を渡す。

「サンキュ」
言って俺は受け取り読み始めた。
「で、何しに来た訳？」
「暇潰し」
「あ、そ。所でさ、智香の弱点って知らない？」
「お前、未だ諦めてなかったのか？」
「ああ、勿論さ。このままじゃ終わらせられないからね」
「ったく、弱点なんか握ってどうするんだよ？」
「そりゃ……これから考えるんだよ」
「あ、そ」
俺は読み終えた雑誌を放り投げた。
「うわっ、僕の雑誌！」
「じゃ、俺帰るわ」
「え、もう行っちゃうの？」
「だって、ウェンズデイ読み終わったし」
「お前、もしかしてそれが目的で来た訳？」
「悪いか」
「二度と来るな！」
怒った春原は俺を追い出した。
俺は肩を落とし、寮を出て自宅に向かった。
その途中、幼稚園の前で先生に会った。
「藤林先生？」
「え！？」
藤林先生は驚いた顔で俺を見た。
「朋也、朋也なの！？」
どうやら、この人は俺を父と間違えているらしい。
「そんなに似てますか？」
「はあ……。何だ、朋徳くんか。そりゃそうよね。朋也はもう、居ないんだもん」
藤林先生の目に涙が浮かぶ。

その時、歩道を一台のバイクが猛スピードで走って来た。
「朋徳ー！」
杏子だった。
「うお！」
俺はまた杏子のバイクに撥ねられて数メートル先まで飛ばされてしまった。
「ごめん、朋徳。大丈夫だった？」
「お前、今の絶対態とだろ」
「違うわよ。止まれなかったのよ」
「お前、免許持ってんのか？」
「持ってるわよ」
言って杏子は免許証を見せた。
「あら、杏子？」
藤林先生が杏子に近付く。
「あ、伯母さん。久し振りです」
「伯母？」
「うん。この人、私のお母さんのお姉さんなの」
「成る程。この違和感はそれだったのか。先生の悪い所がそのまま出てるぜ。轢き逃げとか」
ゴン！――杏子の懐から取り出した国語辞書が俺の額にめり込んだ。
その傍らで藤林先生がクスクスと笑う。
「あ、そうだ朋徳」
杏子が国語辞書を仕舞いながら言う。
「あんたさ、今日は暇？」
「ああ」
「じゃあさ、一寸付き合ってよ。あ、言っとくけど、逃げようなんて考えないでよね」
考える前に言われた。
「しゃあねえな。何処へ行くんだ？」
「買い物よ。商店街まで」「荷物持ちならパスな」

即答してやった。
「未だ何も言ってないわよ」
「お前の事だ。どうせ荷物持ちにさせる気なんだろ？」
「ご明察」
と微笑む杏子。
「そう言う訳だから、早く行きましょ」
言って杏子は俺の手を掴んで歩き出す。
「バイクはどうすんだよ？」
「そんなの預けとけば良いのよ。伯母さん、バイク預かっといて貰えますか？」
「了解」
言って藤林先生はバイクを園内に入れた。

「で、お前の言う買い物はこれか？」
俺たちは今、商店街の喫茶店でジュースを飲んでいるカップルを離れた所にある席で見張っていた。
そのカップルの女の方は、杏子の双子の妹、柊（ひいらぎ）椋子である。
どんな子かは直接会って話した事が無いので解らない。ただ一つだけ解るのは、杏子と同じで光坂に通っているのと、クラスで委員長をやっていると言う事だ。二つだな。
スタイルは杏子より良い。
「朋徳、何鼻の下伸ばしてるのよ？」
杏子が目を細くして俺を見詰める。
「まさか、あんた椋子に惚れた訳？　駄目よ。椋子には彼氏が居るんだから」
「つーと、向かい側の男がそれか？」
「そうよ」
「ふーん。てか、お前は何でこんな事してんだ？」
「あの子が巧くやってるかどうか見る為に決まってるでしょ」

「お前、プライバシーの侵害な、それ」
「あんたも同罪よ」
「……」
「それより、私たちも何か頼みましょ？　何も頼まないで此処に居るのも変だしね。私パフェが良い」
「俺の奢り決定か？」
「嫌なら覚悟しておくのね」
言って笑みを浮かべる杏子。
「奢らせて頂きます」
断ると後が怖いので、承諾しておく。
「すいません」
杏子がウェイトレスを呼ぶ。
「御注文はお決まりでしょうか？」
「えっと、このページにあるパフェ全部」
「はい、パフェ全品ですね？　少々お待ち下さい」
ウェイトレスは注文の品の確認を取ると去って行った。
「帰る」
席を立ち、出口に向かおうとしたが、杏子に項を掴まれる。
「待ちなさいよ」
後ろを顧みると、杏子が睨み付けていた。怖い。
「解ったよ。払えば良いんだろ、払えば」
そう言うと杏子の表情が綻びた。
俺は「はあ……」と溜め息を吐いて席に座る。
それから暫くして、杏子が頼んだパフェの軍勢が運ばれてきてテーブル一面に並べられた。
これ全部で幾らするのだろうか。
俺はウェイトレスが置いた請求書を手に取って金額を見た。
９千９百９９円。これは喜んで良いのか、悲しむべきなのか。
「杏子」
「ん？」

パフェを数個頬張りながら俺に目を向ける。
「自分で払え」
細目で見詰めてきた。
「何言ってるの？　こう言う時は必ず男が払うって決まってるのよ。それともあんた、お金を持ち合わせて無い訳？」
「否、あるけど、壱万はキツイな」
「は？　９千９百９９円でしょうが」
「変わんねえよ！」
と、その時、柊達が席を立ってレジまで移動した。
そして会計を済ませて店を出て行く。
杏子はパフェ共を慌てて胃に詰め込んで席を立ち、請求書を手にしてレジに移動した。
「朋徳、急いで！」
俺は一旦額に手を当て、レジ前まで走る。
「９千９百９９円になります」
俺は財布を出してレジ打ちに壱万円を払い、１円のお釣りを貰う。
店を出て柊達の後を付ける事数分、二人は洋服店に入って行った。
「入るわよ」
「え、でも見つかったら拙いって」
「何の為にあんたを連れて来たと思ってるのよ？」
「二人に見つかっても、こっちもデートだ、と言い逃れをする為」
そう解釈しておこう。
「……あんた、意外と頭良いのね」
図星だった。
意外、は余計な気もするが、それは置いておこう。
「さ、入るわよ」
行って杏子は俺を引いて洋服店に入った。
そこで俺たちは、
「やっぱり付いて来たの？」
鉢合わせしてしまった。

「お姉ちゃん、あれほど来ないでって言ったのに」
プクーッと膨れる柊妹。
「ち、違うのよ。私たちも、その、デートなのよ」
「え、お姉ちゃん、彼氏居たんだ」
「え？　あ、うん。紹介するわね」
挙動不審だからな、お前。
「（前出なさいよ！　）」
杏子が俺を前に出す。
「紹介するわね。岡崎　朋徳って言うの。格好良いでしょ？」
柊妹は俺の顔を見詰めると、
「格好良い」
そう呟いた。
「あ、初めまして！　い、妹の椋子です！」
柊妹は頬を赤らめながら俺の手を掴んだ。
それを見ていた妹の彼氏が顔を顰めた。妬いた様だ。
「（ちょっとちょっと）」
杏子が俺の耳元で言う。
「（椋子、あんたに惚れちゃったみたいよ？　）」
「（はあ？　）」
「（あんたがあまりにも格好良いからじゃないかしら。モテる男ってのは辛いねぇ）」
「（からかってんのか？　つーか、この状況ヤバイぞ。彼氏と喧嘩んなるぞ）」
「（そ、そうね・・・）」
杏子は咳払いをした。
「それじゃあ、私たち行くわね。椋子、巧くやるのよ」
言って杏子は俺の手を掴む椋子の手を外し、俺を引いて店を出た。
「まさか、見つかるなんて思ってもみなかったから、かなり焦ったわ」
「バレバレだったからな、お前」

「大丈夫、ちゃんと誤魔化せてるわよ」
その自信は何処から湧いてくるのだろう。
「知らないからな、俺」
言って俺は歩き出す。
「何処行くのよ？」
「帰るんだ」
「待ちなさいよ」
だが俺は無視して歩き続けた。
すると杏子が走って来て俺の腕に絡み付いた。
「こうなった以上、あんたにも責任あるんだからね。私と付き合いなさい」
「一寸待て。何で俺がお前と付き合わにゃならん？」
「バカね。椋子の前で彼氏だって言っちゃったんだから仕方無いでしょ」
「最悪だ」
「何よ。あんた私が嫌な訳！？」
「嫌だね、お前みたいな乱暴者は」
その言葉にショックを受けた杏子は俺を解放して俯いた。
「じゃあな。お前も二人の邪魔しねえで帰れよ」
そう言って俺は家路に着いた。

After 6. 杏子激怒

月曜。
今日は母に起こされる事無く自分から起床した。
「珍しいな、お前が早起きなんて」
と不思議そうな顔で言う母、智代。
「起こされるのが嫌だったんだ」
「そうか。それは一寸ショックだ」
「あのなぁ……。まあ良いや。朝食作ってくれ」
「解った。何が食べたい？」
「ハンバーグ」
「解った。作ろう」
言って母は台所に移動する。
俺は布団を畳み、トイレを済ませ、洗面所に移動して顔を洗い、歯を磨いて部屋に戻る。
すると丁度、朝食が食卓に運ばれてきた。
盛られてるのは、白米、ハンバーグ、レタス、目玉焼き、味噌汁だ。
俺は箸を取り「頂きます」とそれらを口に運ぶ。美味い。
「朋徳」
唐突に母さんが声を掛けてきた。
「何だよ？」
「お前、今、誰かと付き合ってるのか？」
「何でそんな事訊くんだ？」
「実は昨日、仕事帰りに女の子と寄り添って歩いてるのが見えてな。声を掛けようと思ったが、邪魔しては悪いと思って掛けなかった。で、どうなんだ？」
そう訊ねられ、俺は昨日の事を思い出す。
「否、あれは強引に付き合わされてただけだ。交際してる訳じゃな

い。おっと、もう時間だ」
俺はペースを上げて食事を終わらせ、学校へ行く支度を済ませ、アパートを跡にし、学校へ向かう。
その途中、坂道の所でこの前の少女に出会う。
「あ、この間は有り難う御座います」
少女は俺に気付くとそう言った。
「良いって事よ。じゃあな」
そう言って俺が一人歩き出すと、徐に少女が裾を掴んで引き留めた。
「何だよ？」
振り向き、訊ねる。
「あの、一緒に行っても宜しいですか？」
「ああ、良いけど」
「ではご一緒させて頂きます」
そう言って少女は、俺と共に歩き出す。
「私、古河（ふるかわ）汐と言います」
「あ、そ。俺は岡崎　朋徳」
互いに名乗り終えた所で、校門を抜けて校内へ。
その瞬間、背後に只ならぬ気配を感じた。
俺は恐る恐る振り向いた。
その先には、俺を睨みながら歩いている杏子が居た。
ひょっとして此奴が原因か？
俺は隣を歩いている古河を顧みる。
「古河、悪いけど此処までだ」
俺がそう言って立ち止まると、古河も立ち止まった。
「え？」
と振り向く古河。
「俺、後ろの奴に用があるから」
俺がそう言うと、古河が杏子の事を確認する。
「彼女ですか？」

「否、親友。悪いな」
言って俺は杏子の下に向かう。
「何睨んでんだよ？」
「誰よあの女？」
「あいつ？」
と古河を目で示す。
「あいつは……」
俺は、あいつの事を知らない。
「実を言うと俺もよく知らねえんだ」
「ふーん。それにしては親しげだったじゃない」
杏子が細目でそう言う。
「ああ。前に一度、そこで遇った事がある」
俺はそう言って、坂道に植えられた桜の木を指差す。
「そうなんだ。所であんた――」
杏子がそう言い掛けた所で、別の声が聞こえてきた。
「朋徳」
「ん？」
振り向くと、智香が直ぐ近くで歩いていた。
「お前、いつからそこに？」
「今だ。所で、そちらの方は？」
智香が訊ねると、杏子が顔を顰めて言った。
「あんたね、人に名前を訊く時は自分から名乗りなさいよ」
「それはすまない。私は坂上　智香。１年だ」
「ふーん。私は柊　杏子。朋徳と同じクラスよ。で、あんた、朋徳とはどう言う関係？」
「「いとこ」」
俺と智香は声を揃えて言った。
「あ、そ。なら良いわ」
「何が？」
「何でも無いわよ。って、従妹！？」

「お前、リアクション遅い」
「五月蝿いわね！てか、あんたに従妹が居たなんて初耳よ」
「「居ちゃ悪いのか？」」
俺と智香は再び声を揃えて言った。
「……あんたたち、息ぴったりね」
「「質問に答えろ」」
またもや揃う。
「……」
沈黙した杏子は、捨てゼリフも残さず走り去っていった。
「何かしたか？」
智香の問いに「さあ」と俺は肩を竦めてみせる。
「所で朋徳、春原は居ないのか？」
「あいつなら未だ寝てる」
「そうか。家は近いのか？」
「ああ。ってお前、まさか起こしに行くとか言うんじゃないだろうな？」
「そのまさかだが」
「マジかよ……」
俺は頭を抱えた。
智香は腕時計で時間を確認する。
「未だ時間はあるな。春原の家まで案内してくれ」
「春原ん家なら坂を下った先にある寮だ」
「そうか」
言って坂を下り始める智香。
「お前も来い」
智香が俺の腕を掴んで引っ張る。
「何でだよ？」
「私が一人で行ったら勘違いされるだろ？」
「勘違い？」
俺はそれを元にイメージする。

先ず、智香が一人で春原を起こしに行く。
次に寮の誰かに見られて智香が春原に気があるのではないかと勘違いされる。
俺はそのイメージで吹いた。
「それは面白そうだ。お前、一人で行け」
「却下だ」
「ちっ」
俺が舌打ちをすると、丁度麓に辿り着いた。
左右を確認して道路を横切り、目の前の寮に入って行く。
「部屋は何処だ？」
「そこだ」
俺は廊下に複数ある扉の内の一つを指差す。
智香はドアノブに手を掛け、回して引っ張った。
ガチャ
扉が開き、中の様子が見える。
俺たちは中に入り、春原のベッドの前へ移動する。
「ほお。此奴の寝顔、側で見ると可愛いんだな」
智香が妙な事を言い出した。
俺はお前の目を疑うぜ。
「おい、春原。起きろ」
言って掛け布団を引っ剥がす智香。
「……ったく、何だよこんな朝っぱらから？」
と春原が薄目を開けて智香の姿を確認した。
「げっ！」
春原は飛び起き、慌てて智香から距離を取る。
「お前、何で此処に居るんだよ！？」
「起こしに来てやったからだ。有り難いと思え」
「そうだぞ、春原。お前みたいな奴を起こしてくれる女なんてそうそう居ねえんだから例ぐらい言っとけ」
「だからってね、何で此奴に起こされなきゃならねえんだよ！？」

「何だ、春原。私では不満か。何なら今度から別の奴に頼むぞ」
「結構だ。てかその前に起こしに来るな」
「だがそうするとお前は遅刻するだろ」
智香がそう言うと、春原が俺の耳元で囁く。
「岡崎、どうしてこうなった？」
「校門で出会って、そんでこうなった」
「マジっすか？」
「マジだ。訳を訊いたら、お前の事が好きだからだって言ってたぞ」
「マジで！？」
「ああ。だからお礼言っとけ」
「ああ、そうするよ」
俺の嘘に騙された春原が、智香に近付いて言う。
「智香さん、有り難う御座います！　僕はとても幸せです！　もし宜しかったら、明日も起こしにっ」
そこまで言い掛けた所で、智香の蹴りが春原に決まる。
「何で蹴るんだよ！？」
「何と無くだ」
「何と無くで蹴らないで下さい」
「そんな事言われても、お前を見てると蹴りたくなるんだ」
「それは小学5年男子に見られる、好きな人は虐めたくなるって言うあれか？」
「そんな訳無いだろ。兎に角、早く着替えろ春原。時間が無くなる」
智香がそう言うと、予鈴が鳴った。
「春原」
「五月蝿えな。着替えるよ」
言ってパジャマを脱ぎ出す春原。
「遅いぞ春原。私が手伝ってやる」
智香は春原に手を伸ばし、パジャマを剥ぎ取る。
「一寸やめてくれますかね！？」
大胆すぎるぞ、お前。

と俺が思ってる間に春原の着替えが終わってしまった。

予鈴から４分後、俺たちは校門に居た。
隣で春原が息を荒くしている。
「未だ間に合うか？」
「走ればな」
「そうか。なら走るぞ」
俺と智香は走りだそうとした。
しかし、春原は動かない。
「春原、遅刻するぞ」
「良いんだよ、僕は」
「何故だ？」
「成績が良いんだ」
……。
沈黙が場を支配した。
「こんなアホ、放っておいて行こうか」
俺がそう言って走り出すと、智香が「うん」と返事をして付いてきた。
後ろで春原が、「一寸、僕は何な訳！？」とはしゃいでいる。
「何かはしゃいでいるぞ？」
「放っておけ」
「そうだな」
俺たちは意気投合して春原を放置し、校舎に入った。

教室に着き、ホームルームが始まり、出席が取られる。
教師が順番に名前を呼び、それに反応して生徒が返事をする。
「春原」
の番になり、教師に呼ばれるが返事をしない。

「春原。春原は居ないのか？」
教師は俺の隣の春原の席を確認した。
「また遅刻か……」
「先生」
俺は挙手して言う。
「春原は休みでーす」
「そうなのか？」
とその時、春原が「誰が休みだよ！？」と入って来て叫んだ。
その春原に、杏子の漢和辞典が飛んだ。
「あぐっ！」
春原の顔面に辞書がクリティカルヒットした。
「光平、遅い！」
「五月蝿え。別に良いだろ」
春原はそう言って席に着く。
「お前、顔凹んでるぞ」
「んな訳無いだろ」
「あ、そ」
と俺は顔を反らして席を立った。
「何処行くんだ岡崎？」
教師が俺に訊ねた。
「便所っす」
「そうか。もう授業だから、早めに戻ってこいよ」
嫌なこった。
俺は適当に返事をすると、廊下に出た。
「ん？」
ふと横を見ると、古河が教室の前の入り口で立ち往生していた。
「古河、お前此処なのか？」
「あ、先刻はどうも。お陰で、教室まで来れました。でも、中に入る勇気が出なくて」
「堂々と入れば良いだろ」

俺は扉を開けて古河の手を掴んで一緒に入った。
「お、古河か。ん？」
教師が俺に目を向ける。
「岡崎、お前が連れてきてくれたのか？」
「否、扉の前で立ち往生していたから」
言って俺が教室を出ようとすると、古河が俺の裾を掴んだ。
「岡崎さん、授業はちゃんと出ないと駄目です」
「トイレ行くんだ」
「嘘です。そんな風には見えません」
見透かされてしまった。
俺は仕方なく、席に戻って座った。
「古河、隣来いよ」
言って手招きをすると、古河はのこのことやって来た。
「春原、お前あそこに座ってくれ」
俺は春原にそう言って、教卓の前の空席を指差した。
「何でだよ！？」
「良いから行け！」
俺は春原を椅子から蹴り落とした。
「古河、此処に座ってくれ」
「良いんですか？　此処、この方の席ですけど」
と春原を見下ろす古河。
それと同時に杏子が俺に殺気を飛ばしてくる。
俺はそれを黙殺して古河に答える。
「良いんだ」
「そうですか。ではお言葉に甘えて」
古河は微笑むと隣に座り、鞄を机に置いた。
「そこ僕の席なんですけど」
と横たわりながら言う春原。
「お前の席、今日からあそこな」
俺は教卓の前の空席を指差した。

「あの」
古河が不思議そうな顔で言う。
「そこは私の席です」
「良いんだよ。席変えだ」
「勝手にしても良いんですか？」
「許可は取るさ」
俺は挙手して発言する。
「先生、春原くんが隣だと五月蝿くて授業に集中出来ないんで席変えさせて貰います」
「そうか。じゃあ古河、今からお前はそこ、岡崎の隣だ」
許可は降りた。
「岡崎さん、よろしくお願いします」
古河は俺に微笑み、会釈をした。
「ああ、よろしく。つーか春原、お前早く席に着けよ」
「だからそこが僕の席だって」
「杏子、春原が殴られたいって」
俺がそう言うと委員長の杏子が立ち上がり、春原に近付いて国語辞書を取り出した。
「光平、解ってるわよね？」
「はい！」
春原は立ち上がり、教卓の前の空席に座った。
「光平、忘れ物」
と杏子が春原の鞄を投げた。
「いてっ！」
鞄が顔に当たり、倒れる春原。
パラパラパッパッパー♪
杏子は春原を倒し、５の経験値を得てレベルが２に上がった。
「朋徳、これあんたにあげる」
杏子はそう言って俺に何かが書かれた紙を渡して自分の席に着いた。

俺は受け取った紙を見た。
それにはこう書かれている。
『席変えるなら私を隣にしなさいよ！』
俺は携帯を出して杏子にメールを打った。
『しねえよバーカ。お前を隣にしたら百％俺の寿命が縮む』
送信。
杏子はメールを受信して読むと咄嗟に立ち上がった。
「朋徳は私とその娘、どっちが良いのよ！？」
「そりゃ断然、古河だ」
バキッ！
杏子は携帯をギュッと握って破壊した。
「岡崎さん、嬉しいです。私、惚れてしまいました」
古河が頬を赤らめながら言った。
「マジで？」
「はい。宜しければ、私と」「おっと、そっから先は駄目だ」
俺は古河の言葉を掻き消す様に言った。
「え、どうしてですか？」
「杏子が怒るからな。あいつ、俺にゾッコンなんだ」
「誰がゾッコンなのよ！？」
杏子が漢和辞典を投げてきた。
「うわっ！」
俺は間一髪、それを避けた。
「あっぶねえな、物投げんな！」
「あら、ごめんなさい。手が滑ってしまいましたわ」
「反省の色全然無いからな、お前」
「何か言った？」
「言ってません」
と俺たちが仲良く話しをしていると、教師が咳払いをした。
「お前ら、静かにしろ。授業が始められないじゃないか」
「すみません、先生」

と杏子が謝り、座る。
「朋徳、あんたも謝んなさいよ」
「何で俺も？」
「岡崎さん、謝って下さい」
古河が俺を睨みながら言った。
俺は仕方なしに、教師に謝罪して座った。

午前の授業が終わり、昼休み。
俺と古河は食堂に来ていた。
「混んでるな。何が食べたい？　言えば取って来てやるぞ」
「食べ物は盗んじゃ駄目です」
「否、ボケなくて良いから。で、何が良い？」
「えーと、それじゃあ、カツサンドで」
「解った。取って来てやる」
俺はそう言うと、人混みの中に入り、掻き分けながら進み、お盆に載った最後のカツサンドに手を伸ばした。
すると別の手が伸びて来て一緒に掴んだ。
俺はその手の主を見た。
「智香」
「何だ、朋徳か。すまんが譲ってくれ。食べたがってる奴が居るんだ」
「それは俺も一緒。だから退いてくれ」
「駄目だ」
「春原か？」
「そうだ。って、違う！」
「もう遅いからな。お前、春原に惚れてんのか？」
「んな訳あるか。惚れるとしたら、そうだな」
智香は目を上に向けて考える。
「お前にだな」

「マジで？」
「私に惚れられては困るのか？」
「否、別に困らないけど。ってカツサンドは！？」
俺と智香が話していると、いつの間にかカツサンドが消えていた。
「しまった。取られた」
と落ち込む智香。
俺は仕方なく別のパンを取り、料金を払って古河の下に戻った。
「すまん、古河。タコサンドになってしまった」
と俺は古河にパンを渡す。
「別に構いません。タコサンドもきっと美味しいです」
受け取った古河はそう言って微笑んだ。
「あ、そうだ。お金の方を」
そう言って古河が財布を出そうとするのを、俺は制止した。
「え？」
古河が疑問の表情をする。
「俺の奢りだ」
「え、マジ？　じゃあ僕に頂戴」
と春原が現れて手を差し出す。
「神出鬼没だな、お前。つーか何でお前にやらなきゃなんねえ？」
「友達だからだよ」
「悪い。俺、今までお前を友達だなんて思ってなかった。そしてこれからも思わない」
「思えよ！」
「だったら焼きそばパン奢れ」
「オーケー」
とサインを作ってパンを買いに行く春原。
扱い易い奴だった。
「岡崎、買って来たよ」
春原が焼きそばパンを持って戻ってきた。
「お、サンキュー」

俺は春原から半ば強引にパンを奪取した。
「行こうぜ古河」
言って俺は古河と共に春原から離れる。
「え、一寸！それだけなの！？」
春原が叫んだ。
「ああ！？」
俺は止まって振り向き、春原を睨んだ。
すると春原は「ひいっ！」と怯えた。
俺は前を向き、古河と共に歩き出す。
同時に前から鬼の様な形相をした杏子が俺を目掛けて走ってきた。
「コルァ朋徳！」
ドロップキックを放ち、倒れた俺の上に跨って胸倉を掴む杏子。
「あんた先刻言ったでしょ！？」
「何を？」
「何を？　じゃない！　弁当、一緒に食べようって約束したじゃない！」
「ああ、忘れてた」
ガスン！
杏子が俺の顔面を思いっ切り殴った。
「ってーな。何すんだいきなり？」
「約束破った罰よ！」
「あのー」
古河が騒ぎに割り込んできた。
「何よ！？」
杏子が古河を睨む。
古河はビビって震えながら言う。
「お、岡崎さんを、虐めないで下さい」
杏子は肩を竦めた。
「あのね、これは別に虐めてる訳じゃないの。朋徳が約束を破ったからお説教してるのよ。勘違いしないで」

そうよね？――と俺の方を向く。
目からは「頷かないと打っ殺すわよ！」と言う言葉が伝わって来る。
「そうなんだよ古河。これは虐めじゃないんだ。暴力って言うんだ」
ブチッ！
何かが切れる音と共に杏子に額に青筋が現れた。
「あーんーたーねー！」
ガスン！
杏子が俺の顔面を殴った。
「殴るわよ！？」
「やってから言うなよ」
「あら、ごめんなさい。口より先に手が出たわ」
その発言に俺は言葉を失った。

After 7. 衝撃的事実

俺が学校から帰宅し、ドアを開けようとすると、中から叫び声が聞こえてきた。
「智香を返せってどう言う事だよ姉ちゃん！？」
鷹文叔父さんの声だ。
俺はそっとドアを開け、数センチの隙間から中を垣間見る。中では母さんと叔父が言い合いをしている。
「姉ちゃんが智香を僕らに託して１６年。今更そんなのって無いだろ！？」
何の話しだ？
「確かに、赤ん坊が出来ない河南子の為に智香をお前たちに託してから１６年。今更返せと言うのは私もどうかと思う。けどな、やはり子どもは本当の親の下で暮らすべきだと思うんだ」
「……勝手過ぎるよ姉ちゃん」
「解ってる。だがもう限界なんだ」
「……」
叔父は無言を回答に母さんを見詰める。
「鷹文、返してくれないか」
「……」
「鷹文」
母さんが叔父にしがみつく。
「解ったよ、姉ちゃん。河南子と相談してみる」
叔父はそう言うと玄関に向かった。
靴を履き、ドアノブに手を掛ける。
俺は慌てて移動した。
ドアが開き、叔父が階段へ歩いていく。
俺は叔父を見送り、家に入った。
「母さん、今の本当か？」

「朋徳、聴いてたのか」
「ああ。で、智香が俺の実妹(いもうと)って本当なのか？」
「本当だ」
「ふうん……」
俺は素っ気無い返事を返して玄関のドアを開ける。
「朋徳、何処へ行く？」
「散歩だ」
言って俺は鞄を投げ捨て、外へ出て行く宛ても無く彷徨(うろつ)く。そして辿り着いたのは、近所の河原。そこでは隣町の商業高校の制服を着た奴らが屯している。
奴らは俺に気付くと、一人が眼を飛ばしながらこちらに歩いて来た。嫌な予感がする……。
「お前、岡崎だな？」
「誰お前？」
俺は不良と思しき奴に訊ねる。
ガスン！
不良と思しき奴はいきなり俺を殴った。
「ちょっ、俺が何した！？」
「何もしてねえ。お前は何もしてねえが、お前の母親がな」
「……？」
俺は頭に疑問符を浮かべた。
「あの、母さんが何か？」
「何か？　じゃねえ！」
目の前の輩(やから)はストレートパンチを繰り出してくる。俺は咄嗟にそれを受け止めた。
「俺の母さんが何かしたんなら説明してくれないか？」
「良いだろう」
目の前は輩はそう言うと、手を下ろして口を開いた。
「あれは昨日の事だ。俺たちが学校サボってると、買い物袋を提げた女が現れて、俺たちに学校へ行けと言ったんだ。で、五月蠅えっ

て睨んでやったら思いっ切りぶん殴られてな。お陰であいつら、大怪我しちまってよ」
目の前の輩は橋の下に居る奴らを示す。そいつらは全員、包帯をしていた。どうやら骨折の様だ。
「だからよ、おめえにも同じ怪我をして貰う！」
「うぉっ！？」
迫る攻撃を咄嗟に避ける俺。
「一寸待て！　何で俺が！？」
「それは、俺じゃあの女に勝てないからだ！」
不良が言いながらローキックをしてくる。
「くっ……！」
とても重い。足に激痛が走った。
「てめえ、そんなに熨さっ」
そこまで言った所で、相手のハイキックが俺を襲う。
喰らった俺は激痛に顔を引き攣らせる。
「どうした。反撃は無しか？」
「反撃したいのは山々だが、お前強すぎ。俺じゃ勝てる見込みが無いと見た」
「そうか。だが俺はやめねえ」
こいつウザ。
そう思った俺は目にも留まらぬ速度で不良の背後を取り、首筋に手刀を当ててやる。
「うっ！」
不良は呻き声を上げてバタッと倒れる。
「なんてな。お前、攻撃は重いが遅い。全く、こんな所で無駄な力使わせるな」
言って俺は、そいつの脇腹を軽く蹴ってやる。
「うっ！」
呻き声を上げる不良。
「じゃあな」

と俺はその場を離れる事にした。

古河パンの前にある公園のベンチに、俺は座っていた。
「こんな所で何やってるんだ、俺は？」
自問するが、当然答えは返ってこない。
「ベンチに座っているんだ」
否、返ってきた。しかし、答えたのは俺ではない。
誰かと思い、声のした方を振り向くと、智香が居た。
「何だ、お前か。何してんだ？」
「パンを買いに来たんだ」
言って智香は茶色の袋から紫色の得体の知れないパン？　らしき物を取り出す。
「何だそれは？」
「ヴァリウスパンだ。何か色んな食材を混ぜて作ったらしい」
「ひょっとして早苗さんのか？」
「ああ」
「食ったのか？」
「未だだが」
「捨てろ」
「何を言う。折角タダで頂いた物を捨てるなど勿体ないではないか」
そう言って謎のパン、ヴァリウスパンにかぶりつく智香。
タダって事は、きっと売れ残り。誰の目にも触れずに棚に置かれ続けていたのだろう。
「どんな味だ？」
「かなり美味いぞ。お前も食べてみるか？」
智香はパンを半分にして片方を俺に渡す。
受け取った俺は、半信半疑でそのパンを食べる。不味い。
「お前の舌、どうかしてる」
「どうかしてるのはお前の方だ。こんなにも美味しいのに不味いと

は。早苗さんが聴いたらショックで泣いてしまうだろうな」
そう言いながら、とても美味しそうな顔をする智香。これをどうしたら美味しく食べられると言うのだろうか。
「そうだ、智香」
俺は先程の事を思い出して彼女に訊く。
「お前、叔父さんから聞いてるか？」
「何をだ？」
「お前が生まれた時の事」
その言葉に智香は疑問の表情を浮かべる。
「何故そんな事を訊く？」
「否、何でもない。それより、春原とはどうなった？」
その問いに智香は頬を赤らめる。
「その様子だと何か遇ったみたいだな。何が遇った？」
「べ、別に何も無い！」
智香はそう言うと走り去っていった。
あの様子だと、とても恥ずかしい事が遇ったに違い無い。よし、此処は一つ、俺が一肌脱いでやるとするか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4668d/

智代アフターsecond～朋也が残したもの～

2010年10月13日04時49分発行